

水に漬かって冷たくなった体を温泉に入れるというので小躍りして喜んだ。早速、穴を掘って湯室を造っていい気分が入っていたら、またまた敵に発見されて銃撃を受け、真っ裸のまま飛び出て土手の陰にかくれた。幸いこの日は歩兵一個分隊が護衛していたので、軽機関銃で応戦、撃退してくれたが、この時、不幸にも一名の戦死者を出した。

翌昭和十五年四月、十五年徴集の初年兵が入隊して来たので、初年兵係を命ぜられ、三カ月間の教育を行う。自分達が味わった初年兵当時の苦しい内務班教育、そして演習、特に、誰しもが味わった教育時のビンタは、あのようならい思ひは、出来るだけやりたくないと思った。しかし、どうしても教育上やむを得ず、二度ビンタをくれたことがあったが、復員後その者達と戦友会等で会った時、心から謝罪の念にかられたものだった。

昭和十六年六月十四日、内地帰還の内示が伝達され八月にいいよ内地帰還が決まり、懐かしい郷里を夢

見つつ、一路宇品港に向かって船上の者となった。当時はまだ敵機や潜水艦の攻撃も受けずに、無事宇品港に上陸することが出来た。検疫後の八月四日、豊橋中部第十一部隊に到着、八月六日、除隊となった。

## 広東戦線異常なし

愛知県 加藤 薫

家は代々農業でした。私が小学校高学年の時、父が亡くなり、男三人、女二人の子供と母親で途方に暮れました。次男の私が口減らしのため、竹内洋服店に住み込みで働くようになりました。高等小学校を出たばかりで家の恋しい年頃でしたが、そんな感傷的なことは言っておられませんでした。一日も早く職を身につけるため夜も寝ずに働きました。

昭和十二（一九三七）年三月、年季奉公が終了し、昭和十三年四月から平田町の村瀬洋服店の店員となりました。丁稚奉公中、辛いと思ったことは一度もあり

ません。その当時は不景気のどん底で、職があればよしとしなければなりません。まして父親に先立たれたら、次男、三男は、養子か丁稚奉公に出されるのが当たり前でした。この時覚えたことが軍隊生活に役立つとは夢にも思いませんでした。

昭和十四年一月十日、名古屋の歩兵第六連隊に入営しました。昭和十四年と言えば満州事変が一段落し、日本軍は破竹の勢いで中国大陸へ進出していった時です。親戚の人から盛大な壮行会をしていただき、入営の日は大勢の近所の人に見送られて家を後にしました。徴兵検査は昭和十三年の六月で第一補充の歩兵でした。

昭和十四年一月十日、入営の時は現役入隊。甲種に編入です。兵種は歩兵で、押しも押されぬ郷土部隊でした。

三カ月の初年兵教育が終わると一期の検閲です。三月末のことでした。初年兵教育の時、いろいろとしごかれましたが、丁稚奉公の時、先輩から時にはきつく、時にはやさしく教育されてきたので、人の言うは

どの地獄の世界ではありませんでした。

いよいよ出陣です。初年兵の三分の一と七月の召集兵で南支の三水へ派遣になりました。台湾の高雄には寄港するだけで上陸の許可は出ません。七月中旬に広東ともども三水の横井隊に配属になり警備に就きました。正式には、山本兵団、第二大隊第二中隊（横井隊）です。

三水の警備数カ月後、西南地区に移動、昭和十一年十一月から広東の慶愛中路の警備に就きました。白昼、小銃弾が飛ぶわけなし、テロもない比較的楽な勤務でしたが、兵隊の給与ではどうにもならず、指をくわえて外出を見送ったこともあります。広東奪回とはいかなくても、広東警備を突くため広東周辺の山を占拠した敵がわが第一線と対峙しました。

一般に良口作戦と言われていますが、山本兵団をあげて作戦に参加しました。山岳戦と雨の多いのが特徴でした。一挙に殲滅という訳にはいかず、押しつ押しされつ、五カ月余の日数がかかりました。我が軍は精銳とは言え戦力に限りがあり、敵の背後地は無限に広

がっていました。

もちろん、要所は占領し、兵団本部、部隊本部も部落に設けられ、われわれも部落に分宿しました。ある時、敵の夜襲にあい、小隊長、分隊長が戦死するという悲劇がありました。

六月になり良口作戦が終了し、再び広東警備に戻りました。広東郊外の原野で演習中風邪にかかり、胸膜炎を患い、早速、陸軍病院に転送されました。十日ほど入院加療し、今度は広東省河南の陸軍病院へ送られました。二十日あまり療養の後、高雄の陸軍病院から台中の陸軍病院に後送になりました。それから暮れに堺の全国病院に転送になり、病院生活の最後は名古屋駅前の陸軍病院でした。

昭和十六年三月に一年ぶりで退院、中部第二部隊第三大隊の第八中隊に配属になりました。広東に残った本部は大東亜戦争勃発と共に南方に派遣になり、その後、誰とも会っておりません。戦友会も名古屋に配属になった者とだけ毎年開催しています。

広東時代の戦友は、多分、南海の孤島で玉砕した

か、輸送途時に海の藻屑になったことと思われま

す。第二中隊で勤務中、准尉に呼ばれ「加藤は縫工という特技があるではないか。明日からそれを生かすように」と、縫工兵として本部勤務を命ぜられました。縫工所は連隊内部にはなく、民間工場の一部を借り受け、民間人も徴用し、一緒になって軍全体の被服の修理保全をしました。忙しい時はばかに忙しいのですが、そこは昔とった杵柄、けっこう楽しく軍務に精励しました。一時、小隊長の伝令をしたこともありま

す。昭和十六年十一月、現役除隊になり帰宅しました。復員後、軍属として陸軍造幣局に勤め、特技も生かし軍服製造の仕事に励みました。

この年の十二月八日に大東亜戦争が勃発し、いつ再召集が来るかと心待ちにしていたのですが、昭和十七年の八月から九月のまでの僅か一カ月の教育召集だけでした。軍の方で「加藤は軍服を作らせていた方がお国のためだ」と判断したのだと勝手に想像していま

す。

「平和の礎」を読むと、立派な戦記、戦闘で私の戦歴などお恥ずかしい次第ですが、支那事変のみの兵士も数多くいることにも思いをはせてください。私の軍歴は、病院を上、下番していたようなものですが、そういう兵士も大勢いたのです。たまにアメリカの戦記物に目を通しますが、戦闘中の事前、事後の措置には感服させられます。

「労苦を語る話」ではなく「軍務を語る話」になりましたが、これが一般の軍隊生活だと今でも信じております。